小野寺　　短編競作感想

『劣情に惑う剣』

常盤さんの前作よりもかなり個人的にはいいと思います。やや「こそあど言葉が多いのを除けばエンタメとしてそのまま本屋に置いてあっても不思議ではないくらいに文章は過不足なく落ち着いています。この作品は長いものの一部であるような感がありますが、あんまり短編のようでもない。それから剣道を扱っているせいか古風にも思えました。田中さんなんで死にたがっているのだろう！

『目覚め』

過労死？した私がかつての自分を見に行く話なのでしょうか？ＳＦとしては相当に不気味な作品だと思いました。いやＳＦではないのだろうが。途中、「死者にそんなものがあるかって？まあ、自分で考えなさい。」という箇所がよくわからない。そんなものってどんなものなんだろう？よく読んでみるとけっこうごちゃごちゃとしている箇所もあります。短編としては重い内容が盛り込まれているので中編にしてもいいかなと思いました。

『オレンジの巣』

これは短編というよりも詩だと思う。詩は、まったくではないけどあまり読まない私に判断はできないが、自己主張が強烈な感じはしなくて心地よい静かな詩だと思います。洗練されているのかなあ。とくにいいと感じたのは赤と黄色と緑の電飾が汚らしく混ざりあう、ひとつ、ひとつという箇所です。こういうのは絶対に自分には書けないと思います。完成度高い。

『親子の敗走』

作者の狙いは三人称の客観小説であると思われる。そして成功はしているのだが、ところどころの古色蒼然とした言葉、常套句、最後の一文などの古い手法に頼ってしまっている。まずよくないのは「獅子」というのいきなり出てくる。現代のおもちゃで獅子を模したものといわれてもちょっとイメージできない。獅子ってライオンのことだろうか。あるいは正確なら獅子舞の獅子だろう。それからして、かなりの損をしている。もうひとつ加えると子供にトロは贅沢なのであって共感されにくいという点だろうか。

『出来そこないのマリア』

本来だったら自分の好きそうな内容なので絶賛したいところだけど何度か読んでるうちに瑕疵が目立つようになってしまった。まず１の描写は、１以下の描写ほどには感情が流れていない。視点がばらついている。だからわかりにくい。導入部はもっと鮮明にしたほうがいいと思う。煙草についてでてくるけど煙草だけではわかりにくいと思う。６の会話文や喉に棘が刺さった子供の考察は秀逸だと思う。「マリア」はじめやや時代がかった大げさな表現や「ただひとつだけ」「いつも」「いつも通り」など集まってくる言葉が安易に流れている部分もある。